

キフォステンマの育て方

Cyphostemma

ブドウ科 / Vitaceae

紙状に薄く剥がれ落ちる樹皮と、こぶ状～盤状に肥大する迫力の塊根。生育期には光沢のある大きな葉を茂らせ、休眠期には裸の塊根だけの姿に戻る、メリハリの効いたコーデックス植物です。

基本データ

🌱 成長期

夏型

🌡 耐寒温度

成株で-3℃程度が目安とされるが要注意（幼苗は氷点下を避ける・夜間13℃を下回ったら室内へ）

☀ 日照

フルサン～明るい場所（遮光は最大40%程度まで）

📅 播種適期

春～初夏（4～6月頃）

🕒 発芽日数

前処理ありで2～4週間、なしでは6～12ヶ月と大きく異なる

📍 主原産地

アフリカ（ナミビア・アンゴラなど南部アフリカ乾燥地）、マダガスカル、南アラビア～インド・インドシナ・中国南西部

📏 難易度

🌱 概要・魅力

キフォステンマ（*Cyphostemma*）は、ブドウ科（Vitaceae）に属する塊根性植物の大所帯の属で、認められている種数はおよそ200～250種にのぼります。分布の中心はナミビア・アンゴラなど南部アフリカの乾燥地ですが、マダガスカルにも独自に多様化したグループが広がり、さらに南アラビアからインド南部、タイ、インドシナ、中国南西部まで、意外なほど広い範囲に自生種が点在しています。かつてはCissus属の一部として扱われていましたが、花の中央部にくびれがあることや、蜜腺が4つに分かれる独特の花の構造が決め手となり、独立した属として整理されました。属名はギリシャ語の「kyphos（こぶ）」と「stemma（花冠）」に由来し、花の形そのものが名前の由来になっています。

最大の魅力は、なんといっても存在感のある塊根です。株元がこぶ状・円錐状・盤状に大きく肥大し、樹皮は白・黄橙・褐色などさまざまな色合いで紙状に薄く剥がれ落ちる種が多く、その質感の変化を眺めるだけでも見応えがあります。塊根の上には卵形～披針形のつやのある葉が密に茂り、春から秋にかけて旺盛に展葉したあと、冬にはすべて落葉して塊根だけの姿に戻ります。この一年ごとの「茂る→裸になる」のサイクルも、コーデックス植物ならではの楽しみです。

キフォステンマの主な魅力をまとめると、次の通りです。

- **存在感のある塊根の造形** — 白・黄橙・褐色に薄く剥離する樹皮と、こぶ状～盤状に肥大する塊根の質感が魅力です。
- **光沢のある大きな葉** — 生育期には卵形～披針形の葉を茂らせ、休眠期の塊根姿とのコントラストを楽しめます。

- **分布・種数の豊富さ** — 約200～250種があり、低木タイプからつる性の大型リアナタイプまで樹形のバリエーションも豊かです。
- **マダガスカルの希少種にも出会える** — 分布域が限られた種も多く、コレクション性の高さも人気の理由です。

代表的な種には、滑らかで白く紙状に剥離する樹皮を持つ**C. juttae**、地下の広い根系が円錐状～盤状の巨大な塊根へと成長する**C. elephantopus**、太い幹が頂部で繰り返し分岐する**C. uter**、ナミビア固有種でクリーム色に剥離する樹皮が美しい**C. bainesii**などがあります。樹形は、丈の低い塊根性低木タイプと、巻きひげを使って長く伸びるつる性リアナタイプの2系統に大きく分けられ、同じ属とは思えないほど株姿にバリエーションがあります。SEEDSTOCKでは、こうしたキフォステンマ属の種子を取り扱っています。

キフォステンマの多くの種は、葉や果実に強い刺激成分（タンニンまたはシュウ酸を含むとする説があり、種により見解が分かれます）を含むとされ、誤って口にすると強い刺激を感じることがあります。観賞用として楽しみ、口に入れないようにしましょう。剪定や植替えで樹液に触れる際は手袋の着用をおすすめします。

☀ 置き場所

キフォステンマは強い日照を好む植物です。日照不足になると生育が鈍くなりやすいため、屋外の温室なしで育てる場合は、できるだけフルサン（直射日光が十分に当たる場所）を確保しましょう。どうしても遮光が必要な場合も、遮光率は40%程度までにとどめるのが目安です。

生育期（春～秋）

展葉から落葉まで、旺盛に成長する春～秋は戸外の日当たりのよい場所で管理します。理想の生育温度はおおよそ18～29℃とされ、日本の気候であれば春～秋の屋外環境がほぼ当てはまります。真夏の強い西日など極端な高温にさらされる環境では、株の様子を見ながら遮光や置き場所の調整を検討してください。

休眠期（冬）

冬になると落葉して休眠に入ります。夜間の気温が13℃を下回るようになったら、室内の明るい窓辺などへ取り込みましょう。成熟した株はおおよそ-3℃程度まで耐えるとする情報もありますが、これはあくまで海外の栽培経験にもとづく目安であり、若い株や実生してまもない苗は凍結を避けて管理してください。落葉して塊根だけの姿になった株を、そのまま屋外の寒さにさらすのはリスクが高いため、余裕を持って室内へ移動するのが安全です。

塊根の見せ方

成長した株は、塊根を鉢の縁から半分ほど露出させて飾る「半埋め」のスタイルが人気です。樹皮が紙状に剥離していく質感や色合いの変化を、休眠期の裸の姿でじっくり楽しめます。

キフォステンマは過湿と低温が重なると一気に傷みやすい植物です。休眠期に室内へ取り込む際も、蒸れやすい場所は避け、風通しのよい明るい窓辺を選びましょう。

💧 水やり

キフォステンマ栽培で最大の注意点は、水のやりすぎによる枯死です。乾燥地に自生する塊根植物だけに、水はけのよい用土と、生育期・休眠期でメリハリをつけた水やりが欠かせません。

生育期（春～秋、展葉中）の水やり

基本は用土が完全に乾いてから、鉢底からしっかり流れ出るまでたっぷり与える方法です。展葉中はある程度水を好むともいわれ、水切れが続くと生育が緩慢になりますが、与えすぎると茎ばかりが間延びして徒長し、肝心の塊根が肥大しにくくなるとの指摘もあります。「乾いたらたっぷり、次はしっかり乾くまで待つ」というリズムを守りましょう。

休眠期（冬、落葉中）の水やり

落葉して休眠に入ったら、断水に近い状態まで水やりを控えます。展葉していない期間は完全に水を絶つ、という管理例もある

ほどです。休眠期の過湿は根や塊根の腐敗に直結する最大のリスクなので、迷ったときは水を与えない方を選びましょう。

肥料について

生育期には、月1回程度を目安に薄めた液体肥料を与えると生育を助けます。休眠期の施肥は不要です。多肥は徒長の原因にもなるため、控えめを心がけてください。

キフォステンマは「水のやりすぎで枯死する例が多い」と指摘されるほど、過湿に弱い植物です。迷ったら一日待つくらいの気持ちで、乾かし気味の管理を徹底しましょう。

🔑 用土・植替え

キフォステンマには、水はけを最優先した用土が向いています。過湿による根腐れが最大のリスクとなるため、鉾物質を中心とした配合を選びましょう。

用土の配合例

- 鉾物質中心の配合：軽石・パーライト・溶岩石・ゼオライト・粗砂などの鉾物質を全体の8割程度、非酸性のピートやヤシガラ土を2割程度加える配合。
- シンプルな配合：粗砂・パーライト・軽石を主体に、少量の堆肥を加える配合。
- 実生用：盆栽用の極小粒用土に緩効性肥料（マグァンプなど）を加えた配合を使う例もあります。

市販のサボテン・多肉植物用培養土をベースにする場合も、軽石やパーライトを多めに追加して排水性を高めるのがおすすめです。

鉢

過湿を防ぐため、株のサイズに対してやや小さめの鉢を選びます。塊根を鉢の上に露出させて飾る「半埋め」スタイルも一般的で、素焼き鉢など通気性のよい鉢との相性がよい植物です。

植替えの時期と頻度

植替えの目安は2～3年に一度、または鉢の中が根でいっぱいになったタイミングです。生育が始まる春先に行くと、株への負担を抑えられます。植替え時には根の状態も確認し、傷んだ根があれば清潔なはさみで取り除きましょう。植替え直後は数日～1週間ほど水やりを控え、傷んだ根の回復を待ってから通常の水やりに戻すと安心です。

🌱 発芽のさせ方

キフォステンマの種子は硬実性が強く、発芽が不揃いになりやすいのが特徴です。前処理をするかどうかで発芽までの日数に大きな差が出ることが実際の栽培記録からもわかっているため、ひと手間をかけることが成功への近道になります。SEEDSTOCKで種子をお求めの際は、届いたらできるだけ早めに播種することをおすすめします。

発芽までの手順

1. **果肉を完全に取り除く**：種子の周りに果肉が残っていると発芽を妨げるだけでなく、カビの原因にもなります。流水でよく洗い、果肉をきれいに落としてから播種してください。
2. **種子に前処理を施す**：種子の尖った側（根が出る側）を120番程度の紙やすりで軽く削り、種皮に小さな傷をつけます（物理的スカリフィケーション）。あわせて、常温の水に24時間ほど浸けて種皮を軟化させておくと、吸水がスムーズになります。
3. **お好みで殺菌・活力剤処理を行う**：殺菌剤（ダコニールやベンレートなど）や発根促進剤（メネデルなど）の希釈液に短時間浸ける方法も、栽培者の間で実践されています。
4. **清潔な用土を用意する**：粗砂またはパーライトを5割、水はけのよい培養土やサボテン用土を5割ほど混ぜた、排水性のよい用土を使います。発芽まで長くかかることがあるため、雑菌の繁殖を避けるべく新しい用土を使いましょう。
5. **播種し、薄く覆土する**：種子が重ならないように用土の表面へまき、パーミキュライトなどでごく薄く覆います。
6. **湿度・温度を保つ**：ラップや蓋つきの容器で覆って高い湿度を保ちます。発芽適温の目安は20〜28℃です。常時ぐっしょり湿らせるより、ある程度の乾湿差をつけたほうが発芽成績がよいとの指摘もあります。
7. **発芽を気長に待つ**：発芽までの日数は前処理の有無や種によって大きく異なります。前処理をした種子は2〜4週間ほどで発芽が始まる例がある一方、前処理をしていない種子は6〜12ヶ月、まれに2年近くかかることもあり、非常に不揃いです。数ヶ月たっても反応がなくても、焦らず管理を続けましょう。
8. **発芽後の管理**：発芽したら、日中30℃前後・夜間25℃前後を目安に温度を保ちながら管理します。徐々に容器の通気を増やして湿度を下げ、少しずつ光に慣らしていきます。

キフォステンマの実生は、前処理をした種子としていない種子とで発芽までの日数に極端な差が出るのが報告されています。果肉除去と種皮への軽い傷つけは、発芽率を上げるひと手間として特におすすめです。

病害虫・トラブル

キフォステンマは全体的に丈夫な植物ですが、過湿によるトラブルと、いくつかの害虫には注意が必要です。早期発見と風通しの確保が予防の基本です。

過湿・根腐れ

もっとも多く、もっとも重篤なトラブルです。水はけの悪い用土や頻繁すぎる水やりによって根が軟化・変色し、腐敗が進みます。葉が黄変してきたり、用土がいつまでも湿ったままだった

りする状態は要注意のサインです。水やりの頻度を見直し、風通しのよい環境に置くことが最善の予防になります。

害虫

- **カイガラムシ**：茎や葉に付着して吸汁します。石鹸水を含ませた布で拭き取るか、園芸用オイルで防除します。
- **コナカイガラムシ**：塊根のくぼみや折り目に白い綿状の分泌物として現れやすい害虫です。消毒用アルコールを含ませた綿棒で取り除くか、有機系の殺虫石鹸を使用します。
- **ハダニ**：葉の黄化を引き起こします。乾燥した環境で発生しやすいため、こまめな観察と葉水が予防になります。

いずれも、殺虫石鹸やニームオイルでの防除が広く使われています。同じ薬剤を続けて使うと耐性がつきやすいので、種類を替えながら使うのがおすすめです。

徒長

水や肥料を与えすぎると、茎ばかりが間延びして徒長し、塊根が肥大しにくくなります。どっしりとした株姿に育てたい場合は、日照を十分に確保したうえで、水やりの頻度を抑えめにする管理が効果的です。

取り扱い上の注意

キフォステンマは多くの種で葉や果実に強い刺激成分を含むとされ、小さなお子様やペットが誤って口にしないよう注意してください。剪定や植替えて樹液に触れる場合は、手袋を着用すると安心です。

キフォステンマのトラブルの多くは「水のやりすぎ」が引き金になります。乾かし気味・風通しよく、を心がければ、丈夫に育てられる植物です。

栽培メモ



キフォステンマの種子を探す
QRを読み取る / seedstock.jp